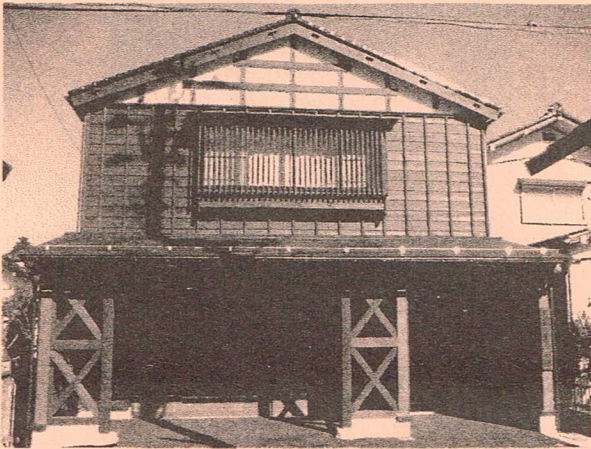




かわらばん 妻入り

事務局

新潟県出雲崎町

教育委員会

☎0258-78-2250

FAX 78-4559

今年の一月に完成した「北国街道妻入り会館」。街並み散策の拠点としてや妻入りの町家の内部を見ることが出来る建物となっていて、四月からは年末年始を除く毎日開館しています。

そこで実際の妻入りの町家ではそれぞれの部屋がどのように使われていたかを説明しながら妻入り会館の各部屋を紹介します。

その前に出雲崎の町屋の外観の特徴を見てみます。

出雲崎の町家は、妻入りに限らず「出入り口（玄関）」が街道の方から見て下手側に設けるのが普通でした。（山側の家は向かって左、海側の家は向かって右が出入り口）

これには、

①床の間や仏間が上手になるようにするため

②上座と下座の位置関係を配慮するため

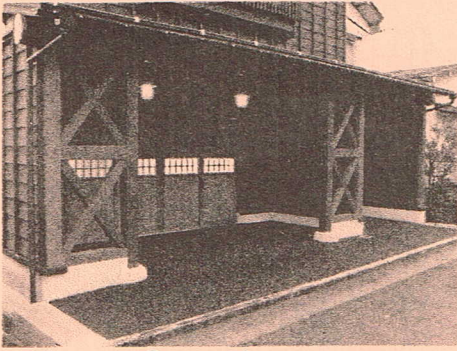
など諸説があります。

また、出雲崎の町家には「卯建（うだつ）」がありません。よく「いつまでも出世できなくて、あまりパツとしない」ことを「うだつが上がない」と言いますが、建物の「卯建」は、火災が発生した時に、類焼を防ぐための一種の防火壁です。あまり奥行きのない「平入り」の町家が並んでいる町場でよく見ることが出来ます。ではなぜ出雲崎には「卯建」が作られなかったのか？それは、妻入りの町家続きで奥行きが深く隣家との境に「卯建」のような防火壁を作ることは、技術的、経済的にも難しかったからと言われています。その代りに出雲崎では、火災から財産を守るために「土蔵」が数多く作られました。

「妻入り」って
どういう意味？

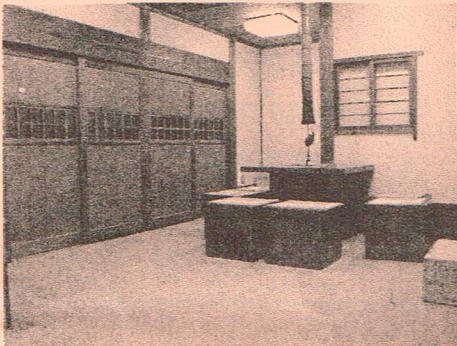
「つま」とは端を意味し、建物では、大棟と直角な壁面、すなわち長手方向のはしの面を「妻」と言います。妻入りとは、屋根の形が山折の二面構成の町家で、屋根の端の部分（妻）を街道の方に向けて正面として、その面に入口（玄関）があるつくりの家のことを妻入りの町家といいます。

妻入りの町家は間口が狭く奥行きのある造りになっていますが、これは江戸時代に間口の幅を基準にして屋敷税が賦課されたので、税金軽減のため意図的に間口を狭くしたこと、または「妻入り」は古い時代に伝わり、人口が増えると、古い町並に連続して新しい町並を造成する必要があるため、古くからの慣習に従って間口が狭い「妻入り」の町家が増えていったなど諸説があります。



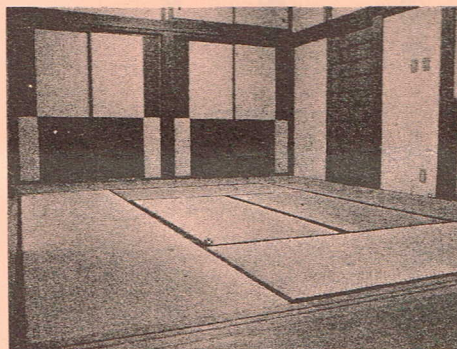
①がんぎ

妻入りの町家などの家でも街道側に底を出して「がんぎ」として商品の陳列などに使われていたりしていました。「がんぎ」には建具が入っていないく開放されていたので、子どもの遊び場になっていて、雪や雨でも遊びこ困ることはなく、また「がんぎ」は道路という公共空間と私的な建物内部をつなぐ緩衝空間になっていました。しかし道路拡張や商店の減少で「がんぎ」が少なくなってきました。



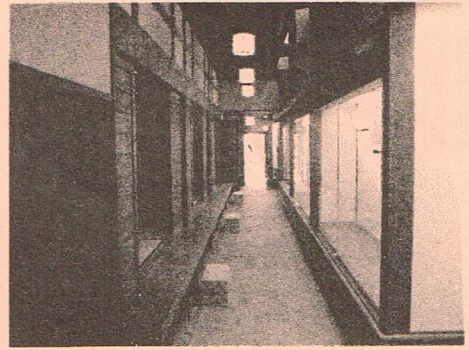
③みせ

街道から一番目の部屋は「みせ」と呼ばれ、土間や板敷、畳敷の部屋でした。土間だった家は漁師や問屋などで、作業場や倉庫に利用されており、「みせ」が板敷や畳敷の家は大工や商家などで、商品を並べて販売したりしていました。普通の民家であっても「みせ」と呼ばれ、部屋として使っていた町家もあり、仕事部屋など目的に応じて様々な形で使われていました。



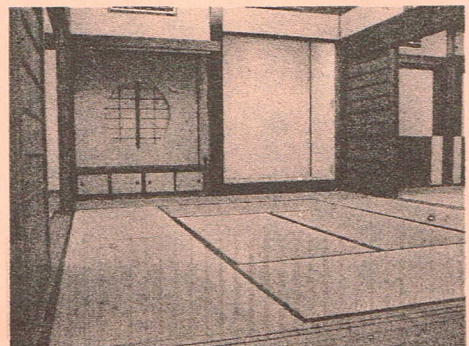
⑤ねま

「ちゃのま」の奥には「ねま」が続きます。これは、文字通り家族の寝室や居間になっていて、家族のくつろげる場所、生活空間になっていました。また家族構成から考えると、主人夫婦の寝室や居間として主に使われていました。



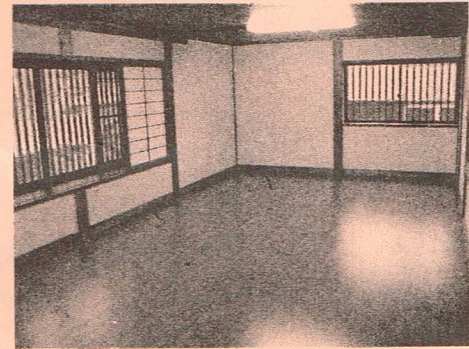
②とおしどま

間口三間くらいの町家では、玄関を入ると裏口までおよそ一間幅の「どま」が通っていて、いわゆる「とおしこわ」になっていました。出雲崎では「こわ」や「たたき」と呼んでいて、粘土に苦汁（こがり）を練ったものを敷き、強く叩いて固めたので「たたき」と呼んだのかも知れません。「とおしこわ」は、船から荷車へ、荷車から船へと、荷物搬出入の大事な通路でした。



④ちゃのま

「ちゃのま」はお客との応接の場になっていて、用材や建具など一番気を使っていた場所でした。ここには囲炉裏が切られている家もありました。吹き抜けになっていて通し土間側の壁面上部には、換気や明り取りのため高窓が付けられていて、他の部屋に比べて明るくなっていました。通し土間と反対側の壁面には、床の間や仏壇、神棚などが主に設けられていました。



⑥おもてにかいとうらにか

「みせ」や「ねま」の上には「おもてにか」と「うらにか」があり、「表二階」は若夫婦、「裏二階」は子ども達の寝室や居間として使われていました。二階上がる階段は、別々になっている家が多く、「ちゃのま」の脇の通し土間の壁上部（明りとり窓の下）に渡り廊下を付けたり、押入に納められた箱階段から二階へ行き来していた家もありました。

海岸地区全ての家を調査

空き家調査報告

昨年十一月にAグループでは、空き家、空き地調査を行いました。

町で進めている「空き家・空き地情報バンク」もスタートし、空き家・空き地対策に力を入れていくことから、協議会でも調査を行うこととしました。協議会では、

平成九年、十七年に続いて三回目の調査となりましたが、今回の調査では妻入りの建物は一年間では、それほど変化がないだろうという意見があり、海岸地区の全ての家を対象として調査することとしました。今回は、尼瀬から井鼻までの全ての家を調査地区とし、「空き家」、「空き地」、「車庫及び倉庫」を調査対象としました。また空き家を「別荘」と「空き家」に細分化し調査しました。別荘とは一年間ある時期（お盆やお正月）に帰ってくる家、空き家はそれ以外の家というように設定し調査を行いました。

また。その結果は表のとおりです。

今回の結果から見えてきたものは、以下の通りです。

①年間を通じて空き家（だれも住まない）が40パーセント

②別荘（盆、正月などに一時的な帰省で使われる）が60パーセント

協議会のメンバーで結果の集計作業を行った後、さらに空き家（別荘）の詳細調査を行うことになりました。これは空き家の所有者、痛み具合、保存状況、構造などを調べました。その詳細調査を行った中から見えてきたものは、①は手入れをすれば使える家もあるが、荒廃している建物も多い。また高齢者が一人暮らしをしていて、亡くなられたり、病院などに入りその後だれが管理をしているかわからない家も多い。

そして空き家の賃貸ということ

を考えると①は住むとしてもいくらかの補修が必要となる。②は一時帰省するため、年間を通じて家を貸すことは難しい、従って年間のほとんどが空き家になってしまふ。またこれは①、②の両方に言えることですが、見知らぬ人に建物を貸すことに対して抵抗を感じる人も多いのではないだろうか。また調査メンバーから①の場合は、

年間を通じて空き家になってしまふので、痛みが早く、そういった点からも賃貸などができれば、家の保存という点から見ても長持ちすると思うなどの意見がありました。

行政区別調査結果

	空き家	別荘	空き家+別荘	空き地	17年度からの増減	
					空き家・別荘	空き地
尼瀬1区	2	13	15	4	5	3
尼瀬2区	0	10	10	3	4	2
尼瀬3区	7	6	13	1	△ 1	1
諏訪本町	2	3	5	12	0	1
伊勢町	4	5	9	3	3	1
稲荷町	5	5	10	11	1	5
岩船町	3	6	9	2	2	△ 2
住吉町	8	10	18	7	9	1
石井町	10	6	16	13	4	7
羽黒町1区	5	3	8	3	2	0
羽黒町2区	7	2	9	0	7	△ 5
羽黒町3区	0	2	2	2	△ 1	0
羽黒町4区	1	5	6	5	1	2
羽黒町5区	4	4	8	6	1	0
鳴滝町1区	6	6	12	3	△ 1	1
鳴滝町2区	3	7	10	6	1	△ 1
木折町1区	8	2	10	6	2	0
木折町2区	10	4	14	4	1	0
井鼻1区	1	3	4	3	0	△ 1
井鼻2区	1	3	4	4	△ 4	△ 1
井鼻3区	1	3	4	7	△ 2	△ 1
井鼻4区	2	6	8	7	4	0
合計	90	114	204	112	38	13

【空き家・空き地】を調査して

羽黒町 佐々木 貞治

空き家・空き地調査は協議会Aグループの主要な活動テーマです。数年前の調査では妻入り構造の家や空き地の状況を住宅地図に色分けし、各字別数値と全体数値を表に纏めて終わりました。

今回の調査は昨年11月に実施しました。少々厄介でした。【空き家・別荘調査】を主題に『空き家の所在地・所有者』『空き家の構造・保存状況』など外観からは判断出来ない項目があり、前回調査にはない難しさがありました。数値の前回調査との比較分析は別掲をご覧願うとして、尼瀬・井鼻まで踵を接するように連続する家並みに空き地が目立ち空き家が年々増える傾向にある事を調査表は示しています。

私に割当てられた調査区域は羽黒町の一部でした。二丁目から鳴滝町境が見渡せる直な家並みを分けるように晩秋の西日が射し込ん

でいました。住宅地図を左手に、

右手に鉛筆、マークペンを鉢巻に、老眼鏡を鼻に、上目で辺りをジロジロ、ウロウロ（ふろやさん、おめさん何キヨロキヨロしてんだね）地元の古老に挙動不審を訝られました。「おれね、空き家と空き地を調べてんだいね、分かんのがあるすけ聞かせてくんねせや」（ううん、どこのことだね）関心を示されたので、住宅地図を開き「この家はいつ頃壊されたんだね」、「そこはどうして空き家になったんだね」、「家の中はどんなだね」、「いまは誰の持ち家だね」質問を繰り返しました。結果は報告書に記しましたが、大半の詳細は不明でした。調査に使用した住宅地図以降に新築された家は見られず、改修された家が散見された程度、早期に手を加えなければ心配な家屋も見られました。近くに住みながら存じ上げない表札を見付け新しく住人になられた方が居られたことを殊の外嬉しく思いました。

た。それにしても、数十年前に廃業した銭湯の看板を今も背負っているとは…、へんな気持ちでした

町は昨年「空き家・空き地情報バンク設置要綱」を定め「空き家・空き地」の所有者から情報の提供を求めています。既に町外から多くの照会が寄せられていると聞いています。近い将来、街並みの其処ここに新しい表札が掛けられ、住人になられた方々の散策姿が見られるようになって欲しいと心から願っています。

春の嵐で延び延びになっていた町内のカラー舗装が漸く終わり、舗装の黄色が淡い春の陽に映え、なんだか街並が一新されたように見えます。



出雲崎空き家・空き地

情報バンクについて

「空き家・空き地情報バンク」は、出雲崎町で居住する事を希望している方に空き家と空き地の情報をホームページで紹介するものです。

情報バンクは、空き家、空き地をお持ちの方の情報提供によりバンクに空き家・空き地が登録されています。

出雲崎町ホームページの「宅地・住宅情報」をクリックすると、情報バンクの詳細が載っていますのでご覧ください。

「暮らしたい」見てほしい」その答えがここにある！

出雲崎町空き家・空き地情報バンク

「出雲崎町空き家・空き地情報バンク」は、出雲崎町で居住することを希望している方や、町内で住宅や土地を探している方に、空き家・空き地の情報をホームページで紹介するものです。
この情報バンクは、皆さまからの情報提供により作成しています。
町内で空き家・空き地をお持ちの方で、当バンクへの情報提供にご協力いただける方はご連絡ください。

空き家・空き地情報バンク

・空き家・空き地情報バンクとは
・手続きの流れ
・お問い合わせ先

空き家・空き地の所有者・希望者の方へ
・情報バンクの活用
・情報バンクの登録申込書
（空き家用/空き地用）

空き家・空き地を探している方へ
・情報バンクの活用
・情報バンクの登録申込書
（空き地用/空き家用）



妻入りの街(三十)

住吉町

磯野 猛

人物往来

天明四年(一七八四)当時江戸で、書家、画家、詩人、七絃琴、印刻、すなわち五藝にすぐれた所から自他共に認められた五適という稱号で名を杜激いう文人が出雲崎町の名主、山本以南をたよって来ました。かつて以南が江戸へ訪れた時知り合った仲でした。

病身の母を連れて来た杜激を以南は早速向かい側にあった空家へ二人を住居として大切にもてなしました。杜激は京都の生まれで禅寺の万福寺で修行し、九州各地で勉強にはげみ、長崎では中国語も学んでいたようです。

成人してより数年後京都に戻り、母をつれて江戸へ知人に誘われ、画家、書家としてその地位を高め、特に当時の文人が大切にしていた印刻の技術で門人なども集まり落着くかに見えましたが、自宅から失火して近所の家も焼けた責めを負う

て引きとめる知人に謝しつつ江戸をはなれることになりました。杜激は先年知り合つて出雲崎へ来るようにとの以南の言葉によるものでした。杜激の五藝は町中に知られ多くの人からその書作品を求められました。寛政四年(一七九二)孝養をつくした母が病没。翌五年母の遺骨を郷里京都へ埋葬するため引きあげ、京で十数冊の著作集をまとめ、十年後の享和二年(一八〇三)再び出雲崎へやつて来て大活躍をしました。十三年後の文化十三年(一八一六)五月この地で杜激は弟子たちに見まもられ病没、羽黒町の浄玄寺にほうむられました。杜激の作品は出雲崎と中越地区に多く残されております。出雲崎で多いのは屏風です。掛軸や額入りのものもあり、杜激の愛した七絃琴と同じものが尼瀬の「くるまや旅館」に絵などと共に大切に保存されております。

杜激のすごした出雲崎での二十数年間は、この町の経済的にめぐま

れた時期で文化の最も盛んな時でもありました。橘屋門前の杜激と住吉町の浄法寺に住んでいた画家の鯛雲泉は共に語り合うことも多かったようです。この時期出雲崎を訪れた文人には亀田鵬斎、大窪詩仏、柏木如亭、十返舎一九、谷文晁、新楽間叟、大村光枝、高久靄崖と江戸でも一流の文人が来ておりました。この間名主は橘屋から住吉町の敦賀屋へと変わりましたが、町の人に愛された杜激は何の不自由もなくこの地ですごしたのです。



出雲崎高等学校の藤井教頭先生から今の季節を彩る『桜』と『卒業』をテーマに寄稿をいただきました。

「卒業生たちよ、

いつの日か桜の木の下で」

県立出雲崎高等学校

教頭 藤井 人志

いつの頃からか春に咲く桜の花の存在を強く意識するようになって。人生の節目節目で、強烈に桜が脳裏に焼き付く。年のせいなのかも知れない。桜は、日本人にとって他の草木とは違い特別な存在であることは聞いてはいたが。

教頭職を拝命するという私の人生の大きな節目で、出雲崎高等学校に赴任することとなり、またしても私の心を大きく揺さぶるすばらしい桜の木々たちに出会うことができた。桜の木一本一本が、新参の私に西越高校創設期からの歩んできた道のりを伝え、しっかりと

頼むよと語りかけているように感じた。今年度卒業した生徒たちも、数多くの先輩たちのように、これまでにそんな桜の声を何度も聞いたことであろう。卒業にあたり、一人一人が嬉しい時、辛い時、あの時の桜の声を思い出してみたい。いろいろなことがあったと思う。

卒業生たちが年を重ね、どこかで、桜の花の存在を強く意識するようになった頃、出雲崎高等学校の桜の木々のことを思い出して何を思うのだろうか。いつかまた、この桜の声を聞きに訪れる、そんな時がやってくることだろう。

目を閉じるとグラウンドに登り、桜の木の下に立ち、四方を感慨深げに見渡している卒業生の姿。髪の毛にはちらほら白い者が、その横に幼い子どもが抱っこをせがんでいる。空には雲ひとつない。太陽が桜の花びらから透けて見えている。桜の花の淡い色が目にしみる。

出雲崎を探求する

出雲崎中学校の2年生が総合学習の一環で出雲崎について調べ、学習しました。ここでは、その内容を紹介したいと思います。

中学生たちは、「出雲崎」の名前の由来や方言、出雲崎で活躍した人物、出雲崎で起こった災害などを調査しました。

出雲崎の由来では、

①昔、大国主命が島根県の出雲から出雲崎に来た時に、出雲の先だから出雲崎と名付けた。

②『出雲山多聞寺』を増築する時、島根県の出雲で大きな災害があり、そこから流れてきた木を使って寺を増築したので、出雲崎になった。・・・いずれにせよ島根県の出雲が関係している、という二つの説を調査していました。

また出雲崎で活躍した人物では、加藤直重：石油手堀井戸の出水排除に成功、新津恒吉：独力で大製油工場を設立、など多くの人物を町史や地元の人からの聞き取り調

査やインターネットを使って調べたそうです。

調査した中学生は、「出雲崎の名前の由来や活躍した人物など今回調べたことに関しては、ほとんど知りませんでした。でもインタビューをしてた皆さんのことが分かり、これからもっと出雲崎のことを調べてみたいと思いました」との感想でした。

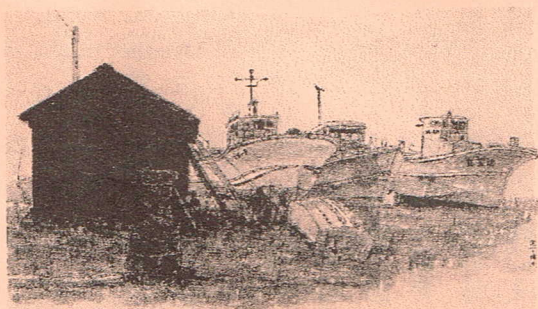
このように出雲崎を調べることによって郷土を大切に思う心をもつて、これからの出雲崎を背負って立つ若い力に期待したいものです。

あとがき

今年の冬は暖かくて雪も無くとも過ぎしやすいと、思っていたら3月になって寒さがやって来ました。2月と3月が入れ替わったような冬だったと思います。

雪が少なかったので外での仕事が多いのはありがたいが予想外でした。ただ、土中の虫が元気になり農作物を食い荒らして困ると、農家の人に聞いたことが有ります。農薬の使用は出来るだけ少なめにしていたら、消費者側はありがたいのですが。そうもいきませんか？

さて、遅くなりましたが、小学校・中学校・高等学校を卒業した皆さん卒業おめでとうございます。4月からそれぞれ進学や、就職で忙しいと思いますが、がんばって下さい。困ったことが有ったら、お父さんやお母さん、お爺さんやお婆さんに相談して下さい。きっと良いアドバイスをして下さると思いますヨ。



石井町

納谷 稔